



『ザ・ヘルプ』～心がつなぐストーリー～

評 テモテ・コール



●ストーリー

舞台は1960年代のミシシッピ州、米国南部の人種差別の中心地とも言えるような地域。黒人はバスの後ろに座らされ、白人とは別の学校に通いレストランやトイレも白人とは別、そして良い収入になる仕事にはつけないようにされた。

そんな状況の中、勇気をもって差別制度に反対する人々が現れた。それは、東部の大学でジャーナリズムを勉強して、地元ジャクソンに帰って来た白人女性スキーター(エマ・ストーン)とジャクソンで働く黒人家政婦たちだった。地元新聞社でのアルバイトで黒人家政婦にインタビュースキーターは彼女の状況に関心をもった。

その家政婦というのは、友人の家で働

くエイビリン(ヴィオラ・デイヴィス)だが、彼女の体験を聞くにつれて、ますます黒人差別に対して腹が立ち、結局エイビリンとその仲間の家政婦たちのストーリーを中心に、匿名で本を出版することを決断する。そして、命がけで彼女たちの話を聞き出す。黒人に同情する人として、白人女性からは仲間はずれになるが、最後まで自分の使命としてこの仕事をやりぬくスキーター。

●対照的な信仰

そんな中、色々な劇的なハプニングがある。家政婦を苦しめる雇い主に密かに復讐する者もいるが、中にはそれを悩んだり、悔い改めたりする者もある。

ジャクソンの裕福な白人女性の偽善的な信仰と、黒人たちの純粋な信仰が対照的だ。自分を苦しめる者をどう救

すか、社会的な悪にどう立ち向かうのか、自分と違った立場の者とどう心を合わせていくのかなど、様々な重要なテーマを追求する、感激させられるストーリーだ。

●注意点

大人はもちろん、中学3年生ぐらいから見ることができ、映画としてお勧めだが、

英語でのことは遣いがかなり荒っぽく、性的な内容がわずかだがあり(かなり露出度の高い服装の婦人が一人登場する)、暴力的なシーン(家政婦が棒でたたかれる)も少しあるので、自分の子どもの理解のレベルを承知の上で、御覧いただきたい。

●わが身を振り返って

本編は確かに、大変「面白い」映画ではあるが、単に娯楽として見るものではなく、上記のテーマについて真剣に考えるつもりで、見てほしい。

「日本にはこんな差別はない」と思いがちかもしれないが、普段気付かないところで起きている。

例えば、外国人が家を借りることを拒否されたり、就職の道が閉ざされたり、いやがらせを言われたりすることがしばしばある。

田舎では、未だに被差別部落に対する偏見が続いている。自分と教育のレベルや職業、経済的なレベルが違うだけでも、人を見下したりすることも多いとは言えない。

そのような状況にあつて、「イエスさまだったら、どうするだろうか」と考えることを子どもに教える意味での刺激的な映画として、お勧めしたい。



2011年 アメリカ映画
監督/脚本◆テイト・テイラー
出演◆エマ・ストーン、ヴィオラ・デイヴィス他
上映時間◆2時間26分
配給◆ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン